

Die Eiche

ディ アイヘ
<http://www.jdg-chiba.com>



Japanisch-Deutsche Gesellschaft
der Präfektur Chiba
〒274-0822 船橋市飯山満町 2-518-1
清和会第2ワールドナースィングホーム内
電話 047-461-9111 Fax 047-461-7010

大戦前後の3人の大学教授を通じて -第一次世界大戦終結100周年-

1918年11月11日、ドイツは休戦条約に調印し、第一次世界大戦は終了した。今年（2018年）でちょうど100周年を迎えることになる。

1871年にプロイセンを中心に成立したドイツ帝国は、ビスマルクによってヨーロッパ有数の国家へと発展した。しかし皇帝ヴィルヘルム2世の世界政策は、第一次世界大戦を引き起こし敗北。敗戦とともに帝国は崩壊した。民主的国家としてワイマール共和国が成立するが（1919）、安定をみることなく、わずか14年でナチスの政権獲得を許すことになった（1933）。第二次世界大戦後は、約40年間、東西2つのドイツに分断されたが、1990年再統一された。今日のドイツは平和国家、経済大国としてEUを牽引している。

以下では、第一次世界大戦前後の各時期を代表する3人の大学教授にスポットをあててみた。

【ヘルマン・ルートヴィヒ・フェルディナント・フォン・ヘルムホルツ】

第一次世界大戦の前、19世紀末から20世紀初頭にかけて、ドイツの大学は名実ともにその絶頂期を迎えた。たとえば19世紀の100年間に生理学で独創的と評価された研究の内の65%、医学では40%がドイツで生み出されたと言われている。当時を代表する生理学者ヘルムホルツ（1821-94）は、ベルリン大学総長就任にあたり次のようにドイツ大学の「学問の自由」を誇らしく謳っている（1877年）。



「現下において、ドイツの大学では、唯物的形而上学のどんな極端な結論でも、またダーウィンの進化論を論拠とするどんな大胆な思弁でも、法王の完全無欠性についてのきわめて極端な神格論と同様に、圧力をかけられることなく自由に講義されることができる」（三好助三郎訳）。

こうした学問の国ドイツに、森鷗外をはじめとする明治のエリートたちは競って留学した。新興国アメリカの学生の留学先もドイツが群を抜いていた。

【マックス・ウェーバー】

ハイデルベルク、ミュンヘンなどの大学で教鞭をとった有名な社会学者ウェーバー（1864-1920）は、第一次世界大戦のさなかの1917年11月7日、そして敗戦直後の1919年1月28日、ミュンヘンの大学生を前に「職業としての精神労働」というテーマで講演をしている。その記録は、のちに前者は「職業と



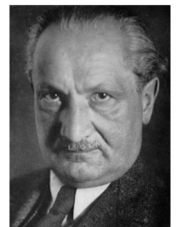
しての学問」、後者は「職業としての政治」と題して公刊されている。

戦後、兵役から解放され、帰国したドイツの学生たちを待ち受けていた思想界は、ロマン主義的な民族主義から共産主義に至るまで、混沌としていた。第一次大戦末期から終戦直後の不安定な中で、精神のよりどころを求める学生たちにウェーバーが訴えたのは、単に生計をうるだけの職業ではない「学問」と「政治」の重要性であった。

1919年に制定されたワイマール憲法は、当時の世界で最も民主的な憲法とされた。ワイマール文化が花開き、ドイツの学問も活気を取り戻していく。しかしやがて到来するナチズムの躍進を阻止することはできなかった。

【マルティン・ハイデッガー】

20世紀を代表する哲学者であるハイデッガー（1889-1976）は、ナチスに入党し、1933年には推されてフライブルク大学総長となった。彼は「ドイツ大学の自己主張」と題する全体主義的色彩の濃い就任演説を行っている。



そこでは「様々に讃美されてきた大学の自由は、ドイツの大学から放逐されよう。それは常に否定的役割しか果たさなかったために、不当なものだったからである」とされ、学生の三つの義務として、「第一に、民族共同体の中に入るとともに行動する義務、第二に、他民族のただなかでドイツ国家の名誉と命運に関わるという義務、第三に、ドイツ民族の精神的付託に関する義務」が挙げられている（山本允訳）。

【歴史からわれわれが学ぶもの】

なぜハイデッガーのような大哲学者までがナチズムに傾倒したのか？そもそもゲーテやシラーを生んだドイツが、なぜ二度にわたって世界大戦とかかわり、ユダヤ人虐殺のホロコーストまで引き起こしたのか？

ここでそれを論ずることはできないが、今日のわれわれにとって重要なことは、過去の歴史から学ぶことであろう。そのことをヴァイツゼッカー大統領は「過去に目を閉ざす者は、現在にも盲目となる」という有名な言葉で表現している。

これに関連して言うドイツでは、つねに「過去と向き合い、過去を忘れない」ために、数多くの記念碑や記念館が建設されている。記念碑のことをドイツ語で「Mahnmahl」というが、これは、mahnen（警告する、注意を促す）という言葉から来ている。常に過去を想起し、二度と悲惨な戦争が起こらないように警告を発するという意味をもっている。

こうした過去の歴史に学ぶ歴史教育は、民主主義を教える政治教育とならんで、ドイツの学校教育でとりわけ重要視されている。（常任理事・編集委員 木戸 裕）



車で走るAutobahnと思い出の街

-ドイツの魅力と現代事情-

ドイツとの関わりは、30歳代に損害保険会社の駐在員として、デュッセルドルフ、フランクフルト、ハンブルグで通算約5年間を過ごしたことに始まった。

当時は多くの日本人が多方面にわたりドイツへの憧れと敬意を抱いていたように思うが、車好きの人にはアウトバーンもその一つである。

71歳になった今も、ツアーでは味わえないレンタカーを使い、家内との手づくり二人旅に挑戦している。ドイツで運転するためには、日本の免許証とそのドイツ語訳、あるいは免許証と国際免許証の両方を所持していれば、6か月間は運転できる。ただし、右側通行、左ハンドルなので慣れるまでは緊張する。レンタカーを借りる場合、中央駅のカウンターで手続きを行っても駅裏パーキングに駐車されているので、多くの難民に遭遇することが多く、昔のドイツと違った面がある。



リュベック付近/アウトバーンの駐車場

直近では今年の6月末から18日間、ハンブルクを起点に北ドイツ、デンマークとポーランドの一部を含め、約2,400キロを走ってきた。記憶に残っているのは、ほぼ一直線で大部分は、制限速度のないアウトバーンと広大な畑の中に点在する北ドイツを象徴する古いハンザ都市の街並みである。リュベック、フレンスブルク、ロストックはその代表である。その他、ベルリン、ポツダム、ツェレ、リュネブルク、他にも足を延ばした。



マイセン近郊の村ののどかな道

最近の7年を思い起こせば、6回に分けてドイツの北から南及びその近隣国を車で旅したことになり、その総走行距離は、一般道を含め約10,700キロに達していた。紙面上、あえて地名のみの説明で終わってしまうが、これまでに訪問された方々のドイツの思い出が蘇ればと思っている。

2011年秋には、デュッセルドルフからケルン、フランクフルト、ヴェルツブルク、ローテンブルク、ハイデルベルク、他、約600キロを巡り、25年振りのドイツであったが当時と変わらない街並みに魅せられた。これを機に、2012年秋にはハンブルクを起点にベルリン、マイセン、ドレスデン、ザイフェン、フランクフルト、その他の街、約1,700キロを走破した。特に旧東独の街は、統合前の面影を残していた。旧東ベルリンに位置するホテルでは、フロント横に置き忘れた貴重品バッグを部屋まで届けてもらったことは忘れられない。続いて翌年の2013年初夏にはミュンヘンから南ドイツ、スイス、オーストリアの約2,700キロ走っている。このドライブ旅ではウルム、シュトゥットガルト、カルフ、バーデンバーデン、ストラスブール、フライブルク、ドナウエッシンゲン、それか

ら南下してチューリヒ、そしてボーデン湖周辺のコンスタンツ、フリードリヒスハーフェン他を経てフッセンに、その後インスブルック、ザルツブルク、そして市川と姉妹都市のローゼンハイムを経由し、ミュンヘンに戻った。ババリア、シュバルツバルト、チロル地方の美しさが心に残った。

4回目は2014年にはフランクフルトからヴェルツブルク、ニュルンベルク、パイロイト、バンベルク、ローテンブルク、ハイデルベルク、リュデスハイム、その他の約1,200キロの冬のドライブとなった。

5回目の2016年初夏には、ライプツィヒから、マイセン、ドレスデン、ザイフェン、プラハ、ワイマール、ゴスラー、ゲッティンゲン、カッセル、ドルトムント他を経由してデュッセルドルフまで約2,100キロを走った。デュッセルドルフでは旧友と会い、1980年代当時の日本の企業進出の凄さを懐かしんだ。

アウトバーンについて良く知られていることは、通行料は無料で、走行速度は、無制限で勾配の少ない一直線の自動車用高速道路である。しかし、現在では速度は、一部に80キロ、100キロ、130キロ等の制限速度がある。それでも無制限区間では、時速200キロ以上で追い越す車もあり、ドイツ車のスピードメーターは260キロまで表示されている。アウトバーンは4車線まである個所もあるが、右車線からトラック、キャンピングカー、乗用車、追い越しスピード車が規則を守り安全に走行しているのはドイツらしい。一般道は郊外が100キロ、市街はそれ以下の制限速度が設けられており、最近は速度取締のオービスも設置されている。



ドレスデンからエアフルト方面-アウトバーンA4 (助手席から撮影)

アウトバーンの歴史の中で、皮肉にもヒトラーのアウトバーン計画により発展したとされているが、現在ではEUの中心としての大動脈の役割を果たしている。

最近の旅を通じてアウトバーンに限らず、明治以来、日本がお手本として来たドイツに対する敬意と愛着は、今も変わらない。

1980年代に駐在して感じたドイツと日本の関係について現代までの変化を見ると、当時よりもアジア近隣国の発展が顕著になり、経済面の関係は薄れつつあるかもしれない。しかし、ドイツと日本は、歴史的関係、勤勉な国民性、高い技術力等の共通点において、まだまだ共感の持てる深いお付き合いができる国だと約1万キロのドライブ旅を通じて実感した。これからもアウトバーンのように一直線でどこまでも続く日独の友好関係が深まることを願っている。(理事・編集委員 志賀 久徳)



ドイツ人と日本人の労働の違い

-ワークライフバランスの実践-

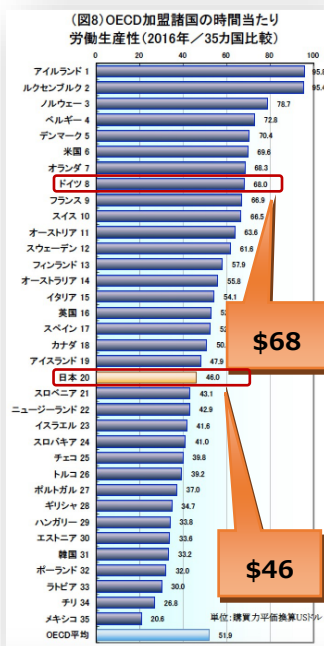
労働観、組織と個人、時間外管理、労働組合、ワークライフバランス

国内でワークライフバランスという言葉が聞くようになって久しい。ドイツ人の生活スタイルを聞くにつけ、同じ一生を過ごすにしても随分、多様性がある人生を謳歌しているようなと感じる。

冒頭でOECDの統計数値が紹介されている。日本は、GDPにおいて社会風土、社会の仕組み、政治方針、個人主義など文化に近いレベルで変えていく動きが無いと到底、ドイツと同じレベルにはたどり着けない。この書籍の冒頭でも紹介されていたが、OECDの時間当たりの一人当たりの生産性が紹介されている。書籍では、2013年のデータが記載されていたが、2016年統計を見てみると、ドイツの労働生産性は、68ドル/時間に対して、日本は、46ドル/時間となっており、ドイツの単位時間当たりの生産性は、約1.48倍である。

労働観の観点で言えば、慣習、深く根付いている意識として「残業していること＝頑張っている、勤務に対してポジティブである」という印象がなかなか国内で拭い去ることが難しい印象を受けるが、ドイツでは、従業員の労働時間が法律（8時間/日労働）、労働組合、労働安全局（日本の労働監督署相当）から厳しく管理され、長時間労働になっていないか検査される。また、従業員は、時間内にどれだけ効率良く価値ある業務をしたかという点で仕事ぶりが評価される。したがって、決められた時間内で仕事を終わることができないのは、無能（能力良く仕事ができない結果、残業になる）であって、時間外を指示するマネージャーは、人事査定や昇進に影響する。24-30日間の有給消化率も年間の有給を100%使い切るのが前提。同僚、上司に気兼ねしなくてよい職場文化が根底として成立しているという違いがある。総合旅行サイト「エクスペディア・ジャパン」の公表資料によると、日本は、有給消化率が2年連続最下位となっている。その理由は、「病気などの万一の為」が最大の理由になっていますが、ドイツでは有給と病欠は、別の休暇制度で運営されている。ドイツ人に病気のときの休暇は、有給と説明したら、遠慮がちに「unmenschlich」（非人道的）と言ったのが印象的で記憶に残っている。

在独約30年の熊谷氏の書籍には、ドイツの社会的市場経済制度、シュレーダー元首相による「Agenda2010」制度導入による財政政策の影響などドイツ人の労働の基盤となる社会構造も解説されていて非常に示唆に富む。（編集委員 勝見 浩明）



仕事でドイツ語を生かしたい



ドイツと私 -堀江 弘隆

今年10月に私は約10年間勤務した日本無線を退職し、三井E&Sシステム技研に転職する。来月から約1年間愛知県に赴任するが、週末を利用して千葉県日独協会の活動に参加したい。10年前は、沖電気工業半導体事業部に勤務。当時から慰霊祭でドイツ大使館員や慰霊祭参加者のドイツ語通訳を担当する機会に恵まれていた。より質の高い通訳を目指したいし、会社でもドイツ語力をアピールし、仕事でドイツを担当したい。



そのため国家資格であるドイツ語通訳案内士の受験を決意した。参考書を買って揃えた2008年5月、日経新聞に自分の勤務先である沖電気工業半導体事業部の売却が掲載された。結果として10月に日本無線に転職するが、転職直前の9月に米国で金融危機、リーマンショックが発生。日本企業の業績もこの影響で悪化。転職市場も縮小していった。間一髪の転職だった。

「ドイツ語を仕事で生かしたい」。この理由で大学時代からドイツ語の勉強を継続し、社会人になってからは、貿易や法律、英語など業務に関する知識も身につけてきた。ドイツに関する仕事をできないかと今でも模索している。

ドイツ語の勉強を始めたのは、一浪して入学した中央大学独文科1年生のときからである。中学時代にバッハの音楽に興味を持ち、中学、高校時代は、吹奏楽部に所属。トロンボーン、フルートを担当した。当時は音大に入学したかったが、ピアノも上達せず、学費の工面もできない。そこでベートーベンやモーツァルトなどドイツ語圏の文学を勉強するのも選択肢の一つだと考え、中央大学に入学した。大学時代は千葉県松戸市に居住。中央大学のある京王線多摩動物公園まで片道2時間の通学だった。

中央大学ではオーケストラ部に入部したかったが、通学時間を考慮すると難しい。そこで帰宅途中にある立教大学交響楽団に入部した。そこでは高校時代の友人が所属し、他大学生も入部が可能であった。演奏経験の無い弦楽器のヴァイオリンを担当することになった。音大では学ぶことはできなかったが、中央大学ではドイツ語、立教大学ではオーケストラに取り組みした。

ドイツ語学習が進むにつれて留学の意志が強まり、ベルリンのゲーティンステイテュートで1ヶ月の語学留学をし、その後1年間バイエルン州のヴュルツブルク大学へ留学した。ドイツ語通訳案内士について。2009年から勉強を始めて、4回目の受験でようやく合格できた。千葉県日独協会での通訳、ドイツ人のためのガイド他、転職先でドイツに関する業務をしたいと思う。



ヴュルツブルク大学ホームページ画像より引用)

ドイツ語の用法について

再帰代名詞の用法とトレンド

ドイツのある金融機関がこのような文を広告に載せました。“Erleben Sie Welt-klasse-musik bei Ihnen zuhause!” (世界クラスの音楽をあなたのご自宅で体験してください！) ドイツ人も混乱するようです。この場合、音楽を聴く人とその家と同じであるので“bei sich”と表記するのが正しいそうです。

また、この再帰代名詞の語順について、次の用例があります。“Immer wieder stellen sich die Menschen diese Frage. (多くの人がいつもこの質問をします。) この再帰代名詞sichは、動詞のすぐ後ろに来るのが伝統的な用法だったそうですが、現在のトレンドは、Immer wieder stellen die Menschen sich diese Frage. このsichは、最後尾に置くのだそうです。実際、ドイツ人に訊いてみると、「何、どちらも良いではないか、何か？」という反応でした。

ここで動詞と組合わせた再帰代名詞を見てみると、興味深い使い方があります。Erasiert sich. (彼はひげを剃る) Die beiden lieben sich. (2人は愛し合っている) これらの場合、sichは、主語自身であります。一方、“Diese Autos verkaufen sich gut.” (この車はよく売れる) の場合、「売れる」からもわかりますが、受動的な意味合いになります。その他、“Sie arbeitete sich müde.” (彼女は、働いて疲れた) という何らかの結果にたどり着くという用法もあるのだそうです。個人的に興味深い用例としては、同様の結果を示す表現です。“Der Dieb stiehlt sich selten reich.” (悪銭身につかず、直訳としては、盗人は、豊かになることは滅多に無い)。用法と文法、奥が深いです。(編集委員 勝見 浩明)

書籍/Buch

過去の歴史を正しく向き合うというのは、どういうことなのか。一つには、歴史上の事実を自国の視点だけで認識するのではなく、過去、お互いに敵対した国同士でも共通の歴史認識を持つことではないかと考える。10年程前、すでにドイツとフランスの間では、共通歴史認識教科書がリリースされている。今回、ドイツ、ポーランド間の共通歴史認識教科書が発行された。ギムナジウム等の学校教育向けとなる。2008年双方の歴史学者でプロジェクトがスタート。全4巻本。現在2巻 (1815年まで) 発行されている。特にドイツとポーランドの共通な歴史事実がどう描かれているのか興味深い。¥2,942- (amazon. co.jp)



活動報告

■ビール祭り

ビール祭りが行われた8月25日は、今年の夏を象徴するような猛烈な暑さでしたが、会員27名がJR新検見川駅近くにある「越中音酒場・はなその座」に集まりました。

夕方5時、須古副会長の司会のもと、金谷会長が開会の挨拶をされ、引き続き、乾杯の音頭を臼井名誉会員が行い、そのスピーチで「ビール祭りの日にふさわしい暑い日の開催」と話されたのが印象的でした。

そして福康子さんのピアノ伴奏のもと全員で恒例の「Ein Prosit」を歌った後、宴会が始まりました。会場は立食式で中央には料理が置かれたテーブルがあり、それを取り巻くようにビール片手



で会員同士が盛んに話し合う光景が見られました。

お腹が一服したころ、配布された歌詞カードを見ながら再びエーデルワイス等のドイツの歌とおなじみの日本の歌を楽しみました。今年のビール祭りで特筆すべきことは、ハイデルベルグ大学への留学を控えた竹内さん(青壮年部)の参加でした。参加者から激励されていたのが目に残っています。なお、今回も受付を橋口名誉会員のお嬢さん(理事・青壮年部：本橋さん)に担っていただき感謝しています。(常任理事・編集委員 吉川 三朗)



■ボトルシップ研究会-講演録アーカイブ

研究会活動にて、星 昌幸氏の下記の講演資料(4回分)を入手しました。歴史上の大変貴重な資料と思い、これらの資料を本協会のホームページの「ボトルシップ研究会」より閲覧することができます。興味のある方は是非お読みください。

- ドイツ兵士の見た NARASHINO
- ドイツ捕虜余話
- ならしの洋楽事始め -捕虜オーケストラが遺したもの-
- 不都合な歴史 -ドイツ捕虜余話2-

今後の予定

- | | |
|-----------|--|
| 11月18日 | ドイツ軍人慰霊祭
今年は、駐日ドイツ大使、並びにドイツ大使館関係者多数、ご参列いただける予定で、下記の要領で実施されます。
時間：11:00-12:00 (予定)
場所：船橋市市営習志野公園 |
| 12月8日 | クリスマス忘年会
時間：12:00-14:30
場所：アルテリーベ東京 (詳細、別途ご案内) |
| 1月19日 | 新春講演会 講師 前跡見学園学長 山田徹雄氏
演題：ドイツ・オーストリア国境地帯における受難劇上演と観光 -ガルミッシュパルテンキルヒェン郡とクーフシュタイン郡- |
| 2019/2-3月 | 青壮年部企画による「トールペインティング教室」を外部講師を招聘して行います。詳細決まりましたら、ご案内します。 |

会員情報

- | | |
|------|---|
| 新人会員 | 田中 瑛 千葉市花見川区
藤川 義弘 佐倉市 |
| 法人会員 | 医療法人 同和会 千葉病院、社会福祉法人 清和会、
(株) 京葉ビル管理。(株) 和幸電気工事、
メルセデス・ベンツ日本 (株) 習志野事業所 |

編集後記

今年は、第一次世界大戦終結100周年。当時のドイツを大学界から考察、そして100年後の現在のドイツに関連する社会状況を取上げました。第一次世界大戦の勃発経緯については、ケンブリッジ大学の歴史学者であるChristopher Clerkの著作“The Sleepwalkers-How Europe Went to War 1914”でもドイツと戦争責任について議論沸騰した経緯もあり、歴史を正しく理解することが常に必要なのだと感じました。勝見 浩明